

# 創造的観光人材育成プログラム始動

## — 国際文化交流学科における観光の学び —

渡邊 太 (Futoshi WATANABE)

鳥取短期大学 国際文化交流学科

### はじめに

鳥取県と鳥取短期大学は、2020（令和2）年12月23日に「観光人材の育成に向けた寄付講座の設置に係る協定」を締結した。この協定にもとづき2021（令和3）年度から国際文化交流学科で「創造的観光人材育成プログラム」を開始した。同プログラムでは、地域の観光産業の発展に寄与する創造的な観光人材の育成が目指されている。

協定締結の背景には、鳥取県における人材育成の課題があった。鳥取県では、観光産業が地域の基幹産業としてさらなる発展が期待できる分野と位置づけられる一方で、観光人材の育成環境が十分ではない点が指摘され、専門的・実践的な職業教育が求められていた。こうした地域課題にこたえるべく、鳥取短期大学国際文化交流学科は「創造的観光人材育成プログラム」を開設した<sup>1)</sup>。

本稿では、「創造的観光人材育成プログラム」初年度の取り組みと、地域観光産業と連携した教育プログラム構築の体制について紹介した上で、鳥取における観光資源開発の可能性を検討する。

### 1. 鳥取県寄付講座と創造的観光人材育成プログラム

国際文化交流学科は、「文化とコミュニケーションの研究と教育を行い、豊かなコミュニケーション力を備え、国際化が進展する地域社会に貢献できる人材を育成すること」を教育目的とし、「言語」「文化」「交流」の3つの分野の学びを通じて多文化共生の態度と実践的なコミュニケーション力を養う教養系の学科である。

国際文化交流学科では、卒業生が学科で培った語学力やコミュニケーション力を活かしてホテル・旅館をはじめとする観光産業に就職してきた実績はあったものの、観光を専門的に学ぶ科目は設置されていなかった。そこで、観光の学びを本格化するために、2021（令和3）年度入学生から教育課程を変更し、新たに鳥取県寄付講座として「地域と観光Ⅰ」「地域と観光Ⅱ」の2科目を開設した。

「地域と観光Ⅰ」（1年次後期集中講義）では、観光産業の全体像を体系的に学ぶとともに、事例研究を通じて観光文化の理解を深める。「地域と観光Ⅱ」（2年次前期集中講義）では、鳥取県内の観光振興について事例研究を通じて学び、ポストコロナの新しい観光を検討する。これら新規の2科目を中核とし、観光人材育成に関連する既存科目6科目を組み合わせることで、「創造的観光人材育成プログラム」の履修要件が設定された（表1）。8科目すべてを履修した受講生には、卒業時に「創造的観光人材育成プログラム」修了証を発行し、観光について専門的に学んだことの証明とする。

なお、既存科目のうち、2年前期の必修科目「地域交流」は従来、観光をテーマにした授業ではなかったが、本プログラムのパイロット事業にあたる「産学官連携実践的教育モデル事業」の実施を機に、2020（令和2）年度から地域観光について学ぶ内容へと授業計画を更新している。

表1 創造的観光人材育成プログラムを構成する科目（令和3年度入学生）

1年前期	1年後期	2年前期	2年後期
現代鳥取学 交流とホスピタリティ 地域社会体験A（通年） 地域社会体験B（通年）	地域と観光Ⅰ（集中）	地域と観光Ⅱ（集中） 地域交流	多文化共生論

## 2. 観光を実践的に学ぶ

「創造的観光人材育成プログラム」では、座学で学ぶだけではなく観光の現場や実践を通じて学ぶアクティブ・ラーニングの機会も積極的に組み込んでいる。

### （1）「鳥取×観光フリースタイル2021」

2021（令和3）年9月9日に、「創造的観光人材育成プログラム」のキックオフ・イベントとして、「鳥取×観光フリースタイル2021」を実施した。イベント企画の狙いとしては、2021（令和3）年4月から「創造的観光人材育成プログラム」が開始し、1年次前期科目として「現代鳥取学」「交流とホスピタリティ」、通年科目として「地域社会体験A」「地域社会体験B」が開講され、後期には「地域と観光Ⅰ」が配置されているものの、このうち観光をメインのトピックとして扱う授業は「地域と観光Ⅰ」に限られるため、1年次の早期段階で観光について専門的に学ぶ機会を確保するためだった。

「鳥取×観光フリースタイル2021」は、後期の「地域と観光Ⅰ」へのスムーズな接続を実現するために、プレ講義イベントとして企画・実施された（写真1）。

「鳥取×観光フリースタイル2021」は2部構成とし、第1部はパネル・ディスカッション、第2部は写真撮影ワークショップを企画した。第1部パネル・ディスカッションのテーマは「ポストコロナの観光を鳥取から発信する」とし、パネリストに石川貴志氏（一般社団法人 Work Design Lab）、三宅航太郎氏（合同会社うかぶ LLC）、井田広之氏（鳥取県庁産業未来創造課）の3名を招いた。

石川氏からは「ポストコロナの働き方・暮らし方から考える観光のカタチ」と題した報告を頂いた。石川氏の報告では、生産年齢人口の減少と企業・個人のニーズの変化に伴い、兼業・副業（複業）を通じた社会貢献や新しい暮らし方としての「ワーケーション」（work + vacation の造語）が注目される中で、「仕事／家族／それ以外」の時間が分断されていた従来の働き方・暮らし方が変化し、「仕事／家族／それ以外」の時間が重なり合いシェアするライフスタイルに向かっていることが指摘された。三宅氏からは「時間をかけて待つこと、分かりやすさを回避すること」と題した報告を頂いた。三宅氏の報告では、国立国際美術館で「風穴 もうひとつのコンセプトアリズム、アジアから」展を企画したキュレーター橋本梓氏のテキストを手がかりとして、観光の意味と価値を改めて考えること、自らの輪郭を曖昧にしながら複数の文脈に介入すること、旅人の少



写真1 鳥取×観光フリースタイル2021 チラシ

し浮ついた身体性、スピードを落とすこと、遠回りをすること、コミュニケーションを誘発すること、効率を追求しないこと、意味や目的なしに行動すること、わかりやすさを回避すること、スピードダウンによって見えてくることなど、観光の概念を根本的に問い直すことが問題提起された。井田氏からは「鳥取県は星取県になりました」と題した報告を頂いた。井田氏の報告では、星取県キャンペーンが広がった要因として、星空がプラスイメージであること、星空は色々な人が色々な形で活用できること、星空は地域の誇りとして共感できる上に伝えたいことが挙げられ、様々なものを組み合わせることで鳥取の魅力を発信することの意義が強調された。



写真2 パネル・ディスカッション

パネリスト三者の報告をもとに行われたディスカッションでは、なぜ人は観光するのか、観光と日常の接近、移動を伴わない観光の可能性、観光による内なる創造性の解放、時間的余白の意味、浮ついた身体性の価値、共感しながら盛り上げられる対象、人口最小県ゆえのかかわりしろ、他者を通してわかる価値、長い時間をかけて次の世代につなぐことなどをめぐり意見が交わされた。第一部のパネル・ディスカッションでは、コロナ禍の激動の中で価値観や暮らし方の変化に応じて観光の概念を問い直す問題提起がなされるとともに、地域の魅力を共有・共感し発信することの意義が確認された(写真2)。

第2部では、カメラマンの柄木孝志氏を講師に招き、湯梨浜町の羽合温泉に移動し、写真撮影ワークショップを実施した。まず、柄木講師から「写真で学ぶ地域の観光資源の捉え方」と題したレクチャーを頂き、SNSを通じて流行が生まれ産業が発展する現代では写真の活用を通じて地域を活性化できることを学んだ。柄木講師によれば、鳥取には無数に多様な魅力があるものの地元の人ほど慣れすぎてその魅力に気づいていないことがある。その潜在的な魅力を地域の観光資源として思い起こさせるのが写真というツールである。レクチャーの後、受講生たちは温泉街や東郷湖畔に出かけて、各々歩き回りながら被写体を見つけ、柄木氏のアドバイスを受けながらスマートフォンやデジタルカメラを用いて撮影に挑んだ(写真3)。

ワークショップ後、柄木講師から「地元の宝物を写真1枚で表現する」という追加の課題が与えられ、学生たちは地元の観光資源を探索し、自分なりに写真で表現する課題に取り組んだ。2021(令和3)年12月16日に写真撮影ワークショップの講評会が開かれ、受講生が撮影した写真一つひとつに対して柄木講師から講評を頂き、受講生たちは大いに刺激を受けた。



写真3 写真撮影ワークショップ

## (2) 三朝温泉スタディツアー

2022(令和4)年2月21日から25日にかけて、集中講義「地域と観光Ⅰ」を実施した。「地域と観光Ⅰ」は武蔵野大学グローバル学部の岩崎比奈子講師が非常勤講師として担当し、旅行形態の変遷、近年の旅行動向、観光産業、観光商品、観光による地域振興、インバウンドの動向と受入環境整備、観光政策など、観光産業についての全体像を把握することを目的とする授業である。授業自体は、講



写真4 三朝温泉まち歩き

義とグループディスカッションを組み合わせた形態で実施されたが、授業のオプションとして、三朝温泉街でのスタディツアーを企画し、実践的な学びを充実させた。

三朝温泉では、まず三朝町観光協会のリエヴェン・アントニー氏の案内で三朝温泉街を散策し、見所の説明を受けた(写真4)。温泉街のメインストリートにあたる温泉本通りには、スマートボールなどが楽しめる娯楽場の他に、喫茶店、食堂、理髪店、民芸店、駄菓子屋など個性的な店舗が並ぶ。現在は、空き店舗を活用することでさらなるにぎわいの創出に取り組んでいるようだ。また、新たに開かれた熱気浴施設「すーはー温泉」、全国

区のテレビ番組でも紹介された藤井酒造、キュリー広場の由来、恋谷橋からの眺めなど、様々な視点から三朝温泉街の魅力伝えて頂いた。キュリー広場を訪れた際には、ラジウム発見者マリー・キュリー夫人の功績をたたえるキュリー祭が1951(昭和26)年から開催されたことをきっかけにフランスとの交流が始まり、そのことがフランスに生まれたアントニー氏と三朝町の間をつなぐ機縁となったことも教わった。

その後、三朝館へ移動し、おもてなし課のスタッフから客室やお食事処での接遇について説明を受け、現場での体験を通じて旅館のおもてなしを実地に学ぶ機会を得た(写真5)。おもてなし課の担当者からは、一つひとつの動作に意味があること、何も考えずに行えばただの作業だがお客様をおもてなしする真心を込めて、どうするのがお客様にとって最善であるかを常に考えながら行うことが大事であることなど、細やかな気くばりにもとづくホスピタリティを学ぶことができた。お食事処では、定位置に器や箸を並べる配膳を体験したが、簡単そうに思えて案外に難しく、受講生たちは四苦八苦していた。体験してみることで、箸の位置や食器の位置にも一つひとつに意味があることを受講生たちが実感している様子が窺えた。

また、沖田雅浩代表取締役社長からは、三朝温泉という地域の中での三朝館の役割、三朝温泉街を魅力的にするための取り組み、そしてコロナ後を見据えた設備投資など、経営の視点からの講話を頂き、学びを深めることができた。新たに改装した温泉露天風呂付の客室も見学し、充実したスタディツアーとなった。



写真5 三朝館おもてなし研修

### 3. 産官学連携体制の構築

創造的観光人材育成プログラムを運営するにあたり、地域の観光産業、観光協会、観光推進機構、観光学を専門とする有識者等のメンバーからなるコンソーシアム会議を構成し、定期的な会議開催を通じて授業構築のための助言を頂くしくみを構築した。コンソーシアム会議方式を採用することで、地域観光の実状に応じ、現場のニーズに即した人材を育成することが狙いである。

第1回コンソーシアム会議は、鳥取県寄付講座の設置に係る協定締結に先立つ2020(令和2)年12月3日に開催し、寄付講座の開設による観光人材育成について関係者一同の理解を得た上で、目指すべき観光人材像や教育に盛り込むべき観点等について意見交換を実施した。目指すべき観光人材像や卒業までに身につけるべき力については、「多様なニーズへの対応やシーンごとに対応が変化するなど柔軟性がすごく重要」「文化資源を観光資源に変えていけるような人材育成」「地域の魅力を客観的に見る力」「全然関係ないものと観光を結びつける力が育成できるとよい」「商品開発力、企画力、そ

して、販売営業力」「マネジメント力や地域の幅広いステークホルダーとの調整力」「人と人をつなぐ、内と外をつなぐ、そういったことができる人材」等の意見が出された。また、「ホテルや旅館で働く人材をつくるのではなく…中略…要は観光的視点で、地域活性化にチャレンジできる人材が必要」「単なる従業員を育成するのではなく、新たな観光をつくる人材を育成」といった意見もあり、既存の枠組みにとらわれないクリエイティブな人材への期待も寄せられた。また、教育プログラムに期待することとして、「自分が現場に行き、こういう風を楽しむことができるということを体験したり、地域の方々とのディスカッションを通じて、教えてもらえるようなものが良い」「実際に行き、体験してもらうのが良い」「自分で体験し、こんなことでご飯が食べられる(仕事になる)ということを知ってもらうことが必要」といった意見が出された。

第2回コンソーシアム会議は、2021(令和3)年3月12日に開催し、夏休みに実施予定のプレ講義イベントの内容を主な議題として意見交換を行った。プレ講義のテーマについては、大江ノ郷自然牧場、和牛・農産物などの食材、米子の寺町、米子城下で星空を見るプログラム、東郷湖畔のウォーキングリゾート、e-bikeなどの新しいテクノロジー、ワーケーションやファミリーワーケーションなどが候補として提案された。また、「創造的観光人材育成プログラム」全体に対して、「滞在から消費が生まれるコンテンツ」開発の必要性や、「学び自体を目的化するのではなく、学びを手段として、何をアウトプットするのか。学ぶ本人の『興味を開発していく仕組み』の必要性」についても意見が述べられた。

第3回コンソーシアム会議は、2021(令和3)年10月7日に開催した。第3回コンソーシアム会議は、この会議じたいを参加メンバーの学びの場として位置づけ、一般社団法人山陰インバウンド機構福井善朗代表理事、森本誠人事務局次長と、株式会社 LANDSCAPE DESIGN 柄木孝志代表にレクチャーを依頼した。山陰インバウンド機構の福井理事と森本事務局次長からは「山陰ツーリズム育成塾」の取り組みについてレクチャーして頂き、意見交換を行った。「山陰ツーリズム育成塾」は島根大学との連携により実施する社会人対象の観光人材育成のプログラムである。同プログラムでは、地域で持続可能な観光についての理解を深め、観光ビジネスの起業や観光部門の新規事業を企画・実践できる人材の育成を目指している。LANDSCAPE DESIGN 柄木代表からは大山の大献灯(和傘灯り)、大山星空で遊ぶツアー、北海道別海町の水平線ウォーク、関西大学と大山観光局による観光プロモーションプロジェクト等の取り組みについてレクチャーして頂き、意見交換を行った。学生に対しては、夢があるものを提示し、学生の目線でも興味をもたせることが大事と指摘した上で、学生のやる気・興味を持ち上げていくためにステージを用意することの必要性が述べられた。

第4回コンソーシアム会議は、2022(令和4)年3月7日に開催し、授業担当者の岩崎比奈子氏から2月21日から25日にかけて実施された鳥取県寄付講座「地域と観光Ⅰ」の授業概要と受講生のリアクションについて紹介して頂き、意見交換を行った。また、次年度の「地域交流」「地域社会体験B」「地域と観光Ⅱ」の授業テーマについての意見交換を行い、1年生と2年生の交流を通じて学びを深めることや、観光について「浅く広く」攻めるか「狭く深く」攻めるか戦略が必要であること、卒業生が集える場を整備することが必要等の意見が出された。

以上のように、開催を重ねるなかでコンソーシアム会議には創造的観光人材育成プログラムについての意見交換に加えて、コンソーシアム会議参加者の学びの場としての機能も備わり、地域連携教育は着実に実を結びつつあると言える。

#### 4. 鳥取における観光資源開発の可能性

創造的観光人材育成プログラムは、鳥取県及び地元の観光産業と連携し、地域の観光振興を担う人材を育成する目的で開始した。さらには、このプログラムの運営を通じた観光振興への寄与も意図している。2020(令和2)年から新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により観光産業は大きな打撃を受け、鳥取県内の観光産業も大きな影響を被っている。観光産業の現場では、コロナ禍の危

機を通じて観光のあり方を根本的に見直す動きも現れ、ポストコロナの観光振興のために観光概念をアップデートする必要性を指摘する声も挙がっている<sup>2)</sup>。「鳥取×観光フリースタイル 2021」のパネル・ディスカッションのテーマとしても取り上げたが、鳥取の観光は今後どのような発展を見込めるだろうか。ポストコロナの観光としていかなる観光振興の可能性が見出せるのか、最後にこの点を少し検討しておきたい。

鳥取県の観光交流局観光戦略課では、2021（令和3）年度から、豊かな自然環境を活かし登山、カヌー、キャンプ、バーベキュー、フィッシングなどのアウトドア活動に適した地域であることをアピールするために、総合アウトドアメーカー「モンベル」と連携し、「アウトドアツーリズム県・鳥取」として情報発信に取り組んでいる<sup>3)</sup>。また鳥取県では、コロナ禍で密集を避けた余暇活動としてキャンプ体験が注目される中で、自然環境を活かした鳥取でのキャンプの魅力を発信するため、鳥取県キャンプ場情報サイト「TOTTORI CAMP とりキャン」を開設している<sup>4)</sup>。近年注目される快適さやラグジュアリー感を重視したグランピング（Glamorous + Camp の造語）施設も増加している。鳥取の星空の美しさを発信する「星取県」の取り組みとも相まって、キャンプやグランピングなど自然環境を活かしたアウトドア活動は鳥取の強みとなっている。さらには、近隣県と連携したサイクルツーリズムの推進や、新たな観光コンテンツとしてのサウナツーリズムにも力を入れている。もとより鳥取は、大山、鳥取砂丘、山陰海岸ジオパークをはじめとする豊かな自然環境に恵まれてきた。これらの自然環境資源を活用したツーリズムは、ポストコロナの観光においても発展が期待できる。

コロナ禍で注目が高まった新しい働き方／ライフスタイルであるワーケーションへの対応も鳥取県では推進されている<sup>5)</sup>。関西圏、関東圏など都市部との交通の利便性を活かし、ワーケーションやファミリーワーケーションの適地であることをアピールするとともに受け入れ体制を整備し、都市部と地方との交流を通じた地域活性化にも取り組んでいる。労働と余暇を分離せず融合的にとらえるワーケーションの概念は観光概念の再考を迫るものでもあり、ポストコロナの観光を考えるキーワードであることは間違いない。

鳥取の歴史と文化も観光資源としての魅力を備えている。特に筆者の研究上の関心とも重なり注目したいのが鳥取の民藝である。民藝とは、庶民である生活者が日常的に使用する工芸品に自然で健康な美を見出した柳宗悦らの造語で、20世紀初期から芸術文化運動あるいは生活文化運動として展開された。鳥取では、柳宗悦の盟友である鳥取の医師・吉田璋也が「民藝のプロデューサー」を自認し、たくみ工芸店、鳥取民藝館（現在の鳥取民藝美術館）を設立するとともに、現代の生活様式に合わせた民藝の新作を推し進める新作民藝運動を牽引した<sup>6)</sup>。鳥取駅前には鳥取民藝美術館、たくみ工芸店、たくみ割烹店が並び、民藝ファンを集めている。また、河原町西郷地区では新たな時代の工芸を発信するために「いなば西郷工芸の郷」が提唱され、「牛ノ戸焼」「因州中井窯」など伝統的な窯に加えて近年のガラス工芸や木工芸の工房もあわせて工芸の郷づくりに励んでいる<sup>7)</sup>。

鳥取の民藝は東部の印象が強いかもしれないが、鳥取中部も実は民藝運動が盛んなエリアである。倉吉では版画家の長谷川富三郎が小学校教員として勤めながら膨大な版画作品を制作するとともに、民藝を通じた教育にも取り組んだ。長谷川は、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司、棟方志功らに師事し、郷土の民藝振興に尽力した。京都高等工藝学校を卒業した徳吉英雄は、従軍経験を経て敗戦後倉吉に帰郷し、民藝同人誌『意匠』を発行している。徳吉は、『意匠』同人らとともに諸国工芸店「風土」を運営し、郷土工芸の発展に寄与した。1946（昭和21）年から1948（昭和23）年にかけて発行された『意匠』には長谷川富三郎や棟方志功も寄稿していた<sup>8)</sup>。工芸店「風土」の経営を主に担ったのは、後に倉吉緋を研究し染織家として大成する吉田たすくであった。徳吉や長谷川と交遊した写真家の高木啓太郎は、鳥取の民俗風景の写真やシベリア抑留の経験を題材とした泥仏などの作品がよく知られる。高木は、カメラ店に加えて民藝喫茶、民藝画廊、土蔵蕎麦などを多角経営し、民藝に携わる人びとにサロンのような場を提供した。倉吉では窯も盛んで、国造焼、福光焼、上神焼、倉吉焼などそれぞれ特色ある作品を生み出している。

長谷川、徳吉、吉田、高木らの活躍により、鳥取中部には今も民藝の伝統が息づく。長谷川や高木

の作品は、市中で親しまれている。吉田たすくが研究した倉吉絣は、鳥取短期大学絣美術館・絣研究室や倉吉絣保存会で技術の継承への取り組みが持続している。高木の土蔵蕎麦は三代目が継承し、民藝画廊では若手の陶芸家らによる「鳥取陶芸家四人展」(出生寺皆生窯、牛ノ戸焼、鳥取因幡焼、国造焼)が開かれるなど、意欲的な取り組みも見られる。また、長谷川や高木も通った「山陰民具」(倉吉市西岩倉町)や、白壁土蔵群で民藝品を扱うセレクトショップ「COCOROSTORE」(倉吉市魚町)など、生産者と消費者を媒介する目利きの存在も重要である。郷土の民藝を観光資源として開発し、さらなる魅力を付加することも地域観光の課題である。

## おわりに

鳥取短期大学国際文化交流学科における「創造的観光人材育成プログラム」は、コロナ禍における波瀾万丈の船出となった。2020(令和2)年度に引き続き、2021(令和3)年度も行動制限が必要となる状況が続いたものの、本プログラムでは、相対的に小規模大学の少人数教育というスモールスケールの利点を活用し、十分な感染対策を講じた上で可能な限り現場に出かけて実践的に学ぶ機会の確保に努めた。

2022(令和4)年度入学生から教育課程を変更し、鳥取県寄付講座「地域と観光Ⅰ」「地域と観光Ⅱ」を特別科目から学科専門教育科目へと変更した。この変更により、鳥取県寄付講座の両科目は卒業要件単位に含まれる科目となる。あわせて地域系科目の内容を見直し、1年次選択科目「地域社会体験B」においても観光をテーマとした授業を新たに展開することとなった。以て、「創造的観光人材育成プログラム」のいっそうの充実を目指したい。

## 付記

本稿は令和3年度鳥取看護大学・鳥取短期大学地域研究・活動推進事業助成金「郷土文化資源の顕彰と観光資源への転用」の成果の一部である

## 《参考文献》

- 1) 渡邊太、「新型コロナウイルス感染症と観光人材育成の課題——国際文化交流学科における観光人材育成に向けて」『鳥取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター年報』第4号(2021)、pp.19-24.
- 2) 前掲1)、pp.23-24.
- 3) 鳥取県「『アウトドアツーリズム県・鳥取』の発信」<https://www.pref.tottori.lg.jp/299556.htm> (2022.04.20 閲覧)。
- 4) 鳥取県「鳥取キャンプ「とりキャン」の魅力発信」<https://www.pref.tottori.lg.jp/299353.htm> (2022.04.20 閲覧)。
- 5) 鳥取県「コンパクトなとっとりで“つながる”ワーケーション」<https://www.pref.tottori.lg.jp/291345.htm> (2022.04.20 閲覧)。
- 6) 木谷清人編『吉田璋也の世界』鳥取民藝美術館、2015年。
- 7) 一般社団法人 西郷工芸の郷あまんじゃく「いなば西郷工芸の郷」一般社団法人 西郷工芸の郷あまんじゃく発行、2018年。
- 8) 渡邊太、「同人誌『意匠』と倉吉の民藝運動」『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』第82号(2021)、pp.71-83.